

江戸川乱歩と精神分析

—論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱(二)」を読む—

広島国際大学 心理科学部 臨床心理学科 鶴田一郎

Abstract: In 1933, Rampo Edogawa's paper entitled, "Secret Passion of J. A. Symonds" appeared as a series in the journal named "Psychoanalysis," published by Tokyo Psychoanalysis Science Research Center, supervised by Kenji Otsuki. The paper was not finished after all. This study examined its second issue, focusing on the reason why Rampo excessively idealized Symonds. The results indicated the following process consisting of two phases: in the first phase, there was identification through introjection from Symonds to Rampo. In the second phase, there was projective identification from Rampo to Symonds. Through this process, there was excessive identification of Rampo with Symonds was. Rampo over idealized Symonds and misunderstood the fact, i.e. he thought "Symonds had never had homosexual intercourse in his real life."

要約: 本稿では、大槻憲二が主宰していた東京精神分析学研究所が発行する『精神分析』に 1933 年に発表された江戸川乱歩の未完の論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱」の内、第二回掲載分について検討・考察を行った。その際、「なぜ乱歩はシモンズを過度に理想化してしまったのか」を考察の焦点とした。その結果、第 1 段階：シモンズから乱歩への「摂取による同一化」、第 2 段階：乱歩からシモンズへの「投影性同一化」という二段階のプロセスが明らかになった。このプロセスにより、乱歩とシモンズの過剰な同一化が起こり、乱歩はシモンズを過度に理想化し、「シモンズは現実生活において同性愛的肉体関係に陥ったことは一切なかった」という事実誤認を乱歩は起こしている。

キーワード(Key Words): 江戸川乱歩(Rampo Edogawa)、精神分析(psychoanalysis)、J・A・シモンズ(John Addington Symonds)、ギリシャ的愛(Greek Love)、パイデラスティア(paidierastia)

I. はじめに—問題の所在—

本稿では、大槻憲二が主宰していた東京精神分析学研究所が発行する『精神分析』に 1933 年に発表された江戸川乱歩(以下、乱歩と略)の未完の論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱」の内、第二回掲載分についての検討・考察を行う。[なお、以下、本稿においては、一部の例外を除いて、旧字体は新字体に、旧仮名遣いは新仮名遣いに直して引用する。]

シモンズ(John Addington Symonds)の「ひそかなる情熱」とは、ギリシヤ的愛(Greek Love)、すなわちパイデラスティア(paiderastia)であり、一般的には同性愛(homosexuality)や少年愛(boy-love)と呼ばれるものである。自らも、その傾向をもった乱歩は、シモンズの研究を通して、自ら意図せず自己探究を行っていくことになる。

しかし、如何に高名な探偵作家であり文学者である乱歩も、残念ながら「精神分析」には素人であった。精神分析を自分のものにするためには、もちろん書物から得られる知識も重要だが、それ以上に、長期にわたる被分析者体験である「教育分析」や、その後、自らが分析者となった際には、被分析者を含む他者との関係を中心に自分自身を分析する「自己分析」などを徹底的に行うことが必要である。

なぜなら、このような体験を経ずに精神分析的考察を行うと、知らず知らずの内に、自分に都合の良いように精神分析を適用してしまうからである。例えば、大人としての行動がとれない自分が嫌いな人物がいた場合、「あいつは内面が十分に大人になっていないから、あんな態度を採るのだ。その原因は幼少期の親との関わりにある。快樂原則が先行して十分に現実原則が育たなかったのだろう」などと解釈する。これは一見、正しい解釈に思える。

しかし、これの決定的な問題点は、単に相手を対象化し、精神分析の理論を単純に当てはめているという点である。つまり、分析者の「自分は今どうあるか？」という点が欠落しているのである。極端な言い方をすれば、精神分析は分析者が自分を道具として被分析者を理解していく営みだと言える。

つまり、前の例で言えば、分析者が、まず問うべきは「なぜ自分は、あの人が、そんなにも嫌いなのだろう」ということである。分析者が自分の内面の欠点である「大人になっていないこと」を相手に投影し、それに対して腹を立てているのかもしれないからである。この意味で、精神分析を、ある人物の考察に適用する場合、分析者側に自らの性格の歪み、内的外的な課題・問題点などが 100%は無理だが、ある程度、意識化されていないと危険

なのである。

次節で詳しく述べるが、乱歩はシモンズを過度に理想化する。乱歩はシモンズの実際生活上で肉体関係を伴った同性愛関係は一切なかったのではないかと断ずる。その「肉の愛」は至上の愛である「パイデラスティア」研究に昇華(sublimation)されていると言う。この乱歩の事実誤認が、なぜ起こったのかについて、以下、考察を試みる。

II. 上掲論文の概要[乱歩の見解]

江戸川乱歩は上掲論文の冒頭で、精神分析で言われる、人生早期において「父を殺し、母と交わる」という心の深層における神話パターン、すなわちエディプス・コンプレックスとは、全く逆の傾向、つまり「父への極端な愛着と、母への関心の薄さ」が、J・A・シモンズにはあったと、シモンズの自伝を引き、次のように指摘する。

「父の死がこんな恐ろしい打撃であろうとは予期しなかった。私[数えて32歳のシモンズー引用者、以下同じ]は父を失ったと同時に、最も親しき友を失ったのだ。父は私に対して、心からの優しい愛情を示してくれたばかりでなく、私の趣味なり仕事なりによき理解を持って、私の仕事の成功に対しては誇りを感じていてくれたし、どんな私の企てにも興味を持ってくれた。かくまで私を孤独に陥れ、私の元気の源であった所のものを根こそぎ奪い去ってしまった。この損失に比すべきものが、^{ほか}外にこの世にあらうとは思われぬ」(江戸川1933,pp.162-163)。

'I hardly expected to feel the blow so crushing. I have not only lost a father, but a best friend. In him the most spontaneous and unselfish love for me was combined with sympathy for my tastes and occupations, pride in my success, if ever I had any, interest in every understanding. I could not think of any other loss which could bring so much sense of isolation, of having now truly been deprived of what hitherto was vital' (Brown,H.F.1903, p.280).

(当時)私[数えで4歳のシモンズ]は母の懐しさがハッキリ分っていたとは言えない。つまり、母を失ったという事実を痛感出来なかった。すべてが茫漠模糊としていた。母が私に対してどんな関係のものであるかさえ知らなかった。私はなき母をあこがれる気持ちになれないで、ともすれば、私自身を余りにも冷淡な罪深い男の様に思うことがあった(江戸川 1933, pp.161-162)。

I cannot pretend that I greatly desired to have a clearer notion of my mother, or that I exactly felt the loss of her. It was all dreamy and misty to my mind. I did not ever imagine what she might have been to me. Sometimes I thought that I was heartless and sinful because I could not want her much (Brown.H.F.1903, p.2).

乱歩は、上のように、シモンズの「母への冷淡に対して父への愛着の強さ」を指摘している。この事に関連して、フロイト(Freud,S.)は「例えば、母親を喪失した少年たちは、代理の妻の役割を演技することで、残された父親の愛情を獲得しようとして同性愛の方向に向かうことがあるのかもしれない(For instance, boys who have lost their mothers may become homosexually orientated through trying to win the affections of the remaining parent by playing the role of substitute wife.)」(West,D.J.1968, p.193)という主旨の発言をしている。

一方、乱歩はフロイトと密接な関わりのあった同時代の精神分析者であるフェレンツィ(Ferenczi,S.1916)の説を引用する。フェレンツィは同性愛を大きく「自己を女性の立場に置くもの」(subject-homo-erotism)と「自己を男性の立場に置くもの」(object-homo-erotism)に分けたが、乱歩によればシモンズは前者であると言い、更にフェレンツィの「自己を女性の立場に置くもの」に関する次の文章を乱歩は引用する。

彼[自己を女性の立場に置く同性愛者]は全くの幼児の時分から、彼自身を父と同じものではなくて、母と同じものと想像する。彼は倒錯せるエディポス・コンプレックスに陥っているのだ。彼は父に対する母の地位に自分自身を置き換えたい為に、そして母のすべての特権を享受したい為に、母の死を願望する(江戸川 1933, p.163)。

When merely a quite young child he imagined himself in the situation of his mother and not in that of his father; he ever brings about an inverted Oedipus complex; he wishes for his mother's death so as to take her place with the father and be able to enjoy all her rights(Ferenczi,S.1916, p.303).

一方、シモンズ(Symonds,J.A.1896, pp.59-61)においても、クラフト=エビング(Kraft-Ebing, R.)の説を引用し、概略、次のように述べている。男性の同性愛(Sexual Inversion)は大きく「後天的」(Acquired)と「先天的」(Congenital)に分けられる。後者の「先天的」は更に「精神病質的」(Psychopathic)、「ウルニングス」(Urnings)、「両性具有的」(Androgyni.)の三つに分けられる。その内、「ウルニングス」は「男性傾向」(Male Habitus)と「女性傾向」(Female Habitus)に分けられる。乱歩は自身に対してと同様に、シモンズを最後に挙げた「女性傾向」であると見なしているのである。

また乱歩(1933, pp.164-165)では、特にウルリッヒス(Ulrichs,K.H.)が命名した「ウルニングス」に注目し、概略、次のように述べている。「ウルニングス」の内、「女性傾向」と呼ばれるものは、いわば「男体女心」であり、シモンズ自身が、これに相当する。ただし、ふつう「男性傾向」をもつ年上の「エラステース」(=愛する者)が、「女性傾向」をもつ年下の「パイデイカ」(=愛される者)を愛するのが「ギリシャ的愛」(パイデラスティア)としては一般的なのだが、シモンズの場合は年齢が逆になっている。つまり、年下の「男性傾向者」が、年上の「女性傾向者」であるシモンズを愛するという関係になっている。しかし、これはシモンズが「男体女心」であったことを考えれば矛盾なく理解できる、と乱歩は述べている。

なお、上述したようにウルニングス(ウルニング)はウルリッヒス(ウルリヒス)の命名によるが、これはプラトンの『饗宴』の中でパイデラスティアが「天上の美神(ウラニア)」の愛」と紹介されていることに^{ちな}因む。次に、そのことを解説した文章を引用する。

1864年からヌーマ・ヌーメンティウス[=ウルリヒス]という変名で『男性間の愛の謎を探る』という5巻本の小冊子を発行、同性愛の理解を打ち出した。それによると男を愛する男は、男性の体に女性の心を宿しているというのだ。彼らは従来^の区分では男性でも女性でもなく、むしろ第三の性である。ウルリヒスはかれらを「ウルニング」—あるいは「ウラニアン」—と呼んだ。プラトンの『饗宴』で、パウサニアスが男同士の愛のことを「美しい愛、天上の

愛、天におわす美神ウラニアの愛」と呼んだのにもとづく(ラッセル,P.[米塚訳]1997, p.58)。

Beginning in 1864, under the pseudonym Numa Numantius, Ulrichs wrote a series of five booklets called “Researches into the Riddle of Love Between Men” in which he began to develop a theory of homosexuality. Men who love men, he argued, consist of a female soul trapped in a male body. They are neither male nor female in the conventional sense, but rather a third sex, which he called urning —or uranian— often the famous myth in Plato’s *Symposium* in which Pausanias calls love between men “the beautiful love, the Heavenly love, the love belonging to the Heavenly Muse Urania (Russell,P.1995, p.31).

一方、シモンズはギリシャ的男性愛と中世の騎士的恋愛との類似性を論じ、この二つを「人類史上燃え出でたる、物狂しきまでに純粹なる、至高至靈の情火である」(江戸川 1933, p.166)と評したが、乱歩も、この点に着目しシモンズの文章を次のように引用する。

騎士的愛は、全然、結婚とは別物であり、また非婚姻的なものであった。騎士が敬慕し奉仕した女性と、そしてその奉仕を受け入れその献身に酬いる所の女性は、決してその騎士の妻たる事は出来なかった。その女性が処女であろうと既婚の婦人であろうと問う所ではなかった。(中略)愛に関する封建裁判所は「既婚者同志の間では、愛はその能力を働かすを得ず」と宣言した。これは十分注目に値する特異点である。この言葉こそ、ダンテがベアトリーチェと結婚しなかった理由について時々発せられる愚問に対して、ただちにかつ決定的に解決を与えるばかりでなく、また古代ギリシャの騎士的愛と中世人のそれとの間における最も著しい類似点を構成することにもなる。プラトーがシンポジウムにおいて論じて、自分の言う所の高揚せられたる愛というのは、結婚という「野卑にして凡俗な」方法には何らの関係もないと主張しているのは記憶すべき言葉である。かかる愛は夫婦的關係が絶対に不可能な間柄の人によって起こされなければならない。そは精神の一状態であって情欲ではない。そして人性の薄弱さが場合には愛人同志を肉欲に導く事はあり得るが、かかる欠点は明らかに理想から外れているものである。この愛は、国家に対して利益があり、社会に対しても有用である結婚や、子供の出産、養育、家庭上の用務、日常の事務の平凡さなどを包含しているところの婚姻関係とは、最も關係の薄いものである。とにかく、理論上では、ギリシャ及び中世の型の騎士道的感情は、共に純粹な、かつ靈的な熱情であって、愛人の例からあらゆる卑

しい思想を除き、肉の拘束を超越せしめ、永久の陶醉をもって彼の心を満たすが如きものであった(田部重治氏訳文による)(江戸川 1933, p.167)(シモンズ, J.A.[田部訳]1930, pp.40-42)。

Chivalrous love was wholly extra-nuptial and anti-matrimonial. The lady whom the knight adored and served, who received his service and rewarded his devotion, could never be his life. She might be a maiden or a married woman, in practice she was almost invariably the latter. But the love which united the two in bonds more firm than any other, was incompatible with marriage. The feudal courts of love in fact proclaimed that “between two married persons, Love cannot exert his powers.” This is a peculiarity well worthy of notice. Not only does it at once and for ever set an end to those foolish questions which have sometimes been asked about the reasons why Dante did not marry Beatrice; it also constitutes one of the strongest points of similarity between the chivalrous love of the ancient Greeks and that of the mediæval races. Plato, in the “Symposium,” it will be remembered, asserts that the exalted love on which he *is* discoursing has nothing whatever to do with the “vulgar and trival” way of matrimony. It must be excited by a person with whom connubial relations are absolutely impossible. It is a state of the soul, not an appetite; and though the weakness of mortality may lead lovers into sensuality, such shortcomings from a distinct deviation from the ideal. Least of all can it have anything to do with those connections profitable to the State and useful to society, which involve the procreation and rearing of children, domestic cares, and the commonplace of daily duties. In theory, at any rate, both Greek and mediæval types of chivalrous emotion were pure and spiritual enthusiasms, purging the lover’s soul of all base thoughts, lifting him above the bondage of the flesh, and filling him with a continual rapture (Symonds, J.A. 1918, pp. 75-76).

上のことに関して的を射た指摘がある。次に引用する。

ギリシャ的愛の理想を受け継ぎ、霊肉分離傾向を身につけるとき、初めて女性を精神的崇拜の対象とする考えが生まれてくるのだと考えることもできる。J・A・サイモンズ[シモンズ]

も、中世の騎士道精神に見られる女性崇拜は、ギリシア的愛の産物であるという。なるほど、女性を少年愛の仕方であつたとき、初めて、女性に対し、官能性から純化された、魂の愛をもつことができるのだというのは面白い考へである(伊藤 2005, p.98)。

以上の考察から乱歩は、シモンズのギリシヤ的愛(パイデラスティア)とは、肉体を超越した精神性の高い愛であり、つまり、ギリシヤ的愛(パイデラスティア)とは「霊の愛」であり、結婚という「肉の愛」とは最も関係の薄いものであり、それは中世の騎士道とも通ずる天上の愛、至高の愛への道だと、明確に結論付けているのである。

Ⅲ. 乱歩上掲論文の検討[筆者の見解]

前節での乱歩の見解を踏まえ、本節では、筆者の乱歩上掲論文に対する検討を行う。その際、近藤(2007)によって「J・A・シモンズには明らかに乱歩の自己投影がみられる」(p.63)と指摘されているように、「投影」(projection)や「同一化」(identification)といった精神分析における防衛機制の視点が重要になってくるが、ここでは(1)シモンズから乱歩への「摂取による同一化」と、(2)乱歩からシモンズへの「投影性同一化」の二段階に分けて考察したい。

(1)「摂取による同一化」(シモンズ⇒乱歩)

最初に二つの乱歩による文章を引用する。前者は上掲論文中にある「乱歩のシモンズ評」であり、後者は「乱歩が自身を評したもの」である。

シモンズ自身は「自伝」の中で、「ただし私は決して Effeminate[女性傾向をもつ同性愛者—引用者、以下同じ]ではなかった」と弁解しているが、弁解しなければならなかった程、つまり彼は女性的であつたのだ(江戸川 1933, p.164)。

また例えば、彼[乱歩]が父母からは受けていないように見えるもう一つの著しい性格がある。ワイニンゲルはすべての男性女性には、それぞれ精神的にも肉体的にも、幾分の異性的なものを含んでいて、人によってその程度が様々であることを説いたが、彼[乱歩]にはそのワイニンゲルの意味での女性的分子が、通常人の平均よりは多量に含まれていた。肉体的には、

声帯部の突起が常人よりも発達していないこと、撫で肩、腰部骨盤の発達などを軽微に自覚するばかりで、外見上それと分る程著しいものでは無論なかったが、しかし、心理的にも女性分子のやや多量であることは争えなかった(江戸川 1936, p.393)。

二つの引用からわかることは、乱歩は自身に対してもシモンズに対しても「女性的」と評していることである。この一致は、どのような心のメカニズムから生まれてきたのだろうか。

精神分析では「摂取」(introjection)による「同一化」(identification)という自我の心的機制が指摘されており、北見・佐藤(1982)では「ある対象に向けている強い感情が動機となって、その対象の所有する価値的内容を自己に無意識的に取り入れ(摂取)、これと同一傾向を示すようになる(同一化)自我の働きである」(p.103)と解説されている。

これを敷衍して、精神分析の視点から、乱歩とシモンズの関係を考えてみると、次のようになるだろう。シモンズへ向けられている乱歩の過剰な共感が動機となり、シモンズのもつギリシャ的愛(パイデラスティア)への志向を、乱歩は自身に無意識に摂り入れ、さながら「乱歩=シモンズ」となるような同一化の傾向を示している。そのため、上に引用した二つの文章でも、シモンズも「女性的傾向」、乱歩自身も「女性的傾向」と述べているのである。

更に言えば、乱歩は自身が引用したワイニンゲル[ヴァイニンガー](Weininger, O. 1908, pp.7-13)の言う、両性具有的な未分化地点である「両性性」(Bisexualität)の領域と、理想的男性 M に限りなく近づいている「男性的な男性」の領域との中間領域、すなわち「女性的な男性」の領域に、乱歩自身、及び自身が同一化しているシモンズを平行に位置付けているのである。

(2) 投影性同一化(乱歩⇒シモンズ)

この項においても最初に二つの文章を引用する。今回は前者も後者も「乱歩によるシモンズ評」である。

恐らく彼[シモンズ]は、現実のエラステース[愛するもの]なりパイデイカ[愛されるもの]なりと結びつくのは、世間に対して、その相手に対して、いや何よりも彼自身に対して、余りにも臆病で潔癖だったのではないかと思われる。では彼は、あの情熱のはけ口をどこに求めた

のか。私が思うのに、彼の生涯の事業こそ、そのはけ口であった。あの夥しい著述の全体が、謂わば彼のヘルメス[ギリシャ神話で「靈魂の導者」]であった。意識的にせよ無意識的にせよ、反社会的願望についての苦悶、闘争、そして昇華。如何にもこの精神分析学上の言葉は彼の場合に適切であった(江戸川 1933, p.168)。

サイモンズ[シモンズ]が興味を示した時代(古代ギリシャ、ルネサンス)や人物(ミケランジェロ、チェリーニ、ホイットマンなど)は殆んど例外なく同性愛と結びついている。私[乱歩]の「サイモンズのひそかなる情熱」とはそのことを意味したもので、彼[シモンズ]の全著作の中から、同性愛への彼のひそかなる情熱を、実証的に探し出そうとしたのである(彼[シモンズ]は実行家ではなかった。あくまでも極秘の情熱として、研究にかこつけて、その片鱗を吐露していたにすぎない)(江戸川 1954, p.285)。

一旦、シモンズから摂り込まれ乱歩に同一化されたものは、次の段階として再び乱歩からシモンズへ投影される。その際、摂り込まれたものが、そのまま逆投影されるのではなく、乱歩の中で極端に理想化されたものが、再びシモンズに投影されるのである。このメカニズムを「投影性同一化」(projective identification)と言うが、小此木(2002)では投影する者と投影される者の関係を次のように説明している。

その対象[乱歩の場合はシモンズ]が愛されるのは、本来は自分[乱歩]が得たいと求めている完全さ、すばらしさを相手[シモンズ]に見出すためである。この過大評価とほれこみがさらに進むと、直接の性的な満足などは棚上げされて、もっと献身的なものになる。それは若者の熱狂的な愛にしばしば見られる。この場合、自我はますます無欲で、つつましくなり、対象はますます立派に、高貴なものになる(小此木 2002, p.166)。

これを敷衍して、精神分析の視点から、乱歩とシモンズの間を考えると次のようになるだろう。乱歩がシモンズに強く惹かれるのは、本来は乱歩自身が無意識に獲得したいと思っている「完全さ」「素晴らしさ」「理想の愛」をシモンズの中に見出すためである。この過剰なシモンズへの惚れ込みが更に進むと、シモンズと同一化した乱歩自身も直接的な肉体の関係をパートナー(岩田準一)ともつことは無視され、もっと精神性を追求する愛への志向となる。その究極がギリシャ的愛(パイデラスティア)である。それ故、乱歩の見解

では先に引用したように、シモンズのギリシャ的愛(パイデラスティア)は肉体的なものには一切向かわず、精神の高みをひたすら求めて、生涯を通じた文学研究という形で「昇華」(sublimation)されたというのである。この証左として次のように乱歩が述べる肉体的同性愛が疑われた岩田準一との関係への弁明が残されている。

ちょっと断っておくが、岩田君とは同性愛文献あさりの点で気が合っていたので、彼[岩田準一]は私[乱歩]よりずっと年少であったけれども、二人の間に同性愛関係があったわけではない。よく旅をして一緒に泊まったりしたが、私[乱歩]は彼[岩田準一]と手が触っても嫌悪感を催すほどであった。そういう意味ではなく、岩田君は文献あさりの方では、私の師匠格に当り、人間が好人物で、おしゃべりで、オッチョコチョイで、そのくせ勿体ぶり屋だったから、無口で鈍重で、「勿体ぶり」の逆の性格の私とは、非常にウマが合ったのである(江戸川 1954, pp.282-283)。

本節の第一項で引用したように、乱歩がシモンズの女性傾向への強い否定を肯定と受け取ったように、上の引用中の強い否定は肯定とも受け取られるのである。単純な精神分析的解釈である「強い否定は肯定」という定式を乱歩はシモンズに適用しているのに、自身に対しては全く忘れ去ったような書き方をしている。そこに筆者は乱歩の「錯誤行為」(parapraxis)を見る。つまり、乱歩は、岩田準一との関係を疑われたのだが、理想化されたシモンズ像と過度に同一化していたことにより、それを無意識に強く否定してしまったのではないかと思われる。

乱歩にとっては生涯にわたる探偵小説の執筆と研究、シモンズにとっては生涯にわたる文学研究に、ギリシャ的愛(パイデラスティア)への志向が、精神性の高いレベルで昇華されるという過度の理想化は、当然、現実との齟齬をきたす。乱歩もシモンズも、何と云っても、生身の人間だからである。伊藤(2005)はギリシャ的愛を論じた文章で次のように述べている。

肉と関わりのないところで魂の徳を追求することが、反面、逆に肉の快樂主義を呼び醒ますこともありうる。魂の愛が神秘的な境地をさまようとき、肉の衝動はかえって魂の制圧を離れて、魂のあずかり知らぬ場所で、快樂を貪り始めるのである(伊藤 2005, p.66)。

このようなことから、シモンズへ投影された、乱歩の過度に理想化された自己像は、現実生活においては事実誤認を生み出すと考えられるのだが、それを筆者は乱歩の「錯誤行為」と呼びたいのである。この無意識の錯誤行為を意識化していくことが乱歩の次の課題だったのではないかと思われる。精神分析的に言えば、シモンズへ投影された乱歩の過剰に精神化された理想の愛について「投影の引き戻し」(withdrawal of projection)を行わなければならないのである。

しかし、それを本人が望まなかったのか、そもそも、そのような発想自体がなかったのか、現実には乱歩は動き出していない。大槻憲二主宰の精神分析研究会に接近したのは、意識的には、この会に同性愛研究者がいたからであろうが、実は無意識的には、上の自身の課題(パイデラスティアをめぐるシモンズとの投影関係)を精神分析家と共に追求しなかったのではないかと思われるのである。

IV. おわりに—まとめに代えて—

本稿では、江戸川乱歩の未完の論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱」の内、第二回掲載分について検討・考察を行った。その際、「江戸川乱歩は、どうしてJ・A・シモンズを過度に理想化してしまったのか」という視点からアプローチした。その結果、次の二段階により、このことが起こっていることがわかった。

第1段階はシモンズから乱歩への「摂取による同一化」であり、第2段階は乱歩からシモンズへの「投影性同一化」である。第1段階においては、乱歩のシモンズへの過剰な共感から「乱歩=シモンズ」という同一化を生み出していた。そして、第1段階によって、一旦、シモンズから摂り込まれ乱歩に同一化されたものが、次の第2段階で、再び乱歩からシモンズへ極端に理想化された形で逆投影された。

以上のメカニズムによって、乱歩はシモンズ思想と現実生活を過度に同一視し、現実生活においてもシモンズは同性愛的「肉の愛」に陥ることは一切なく、それは高度に精神化された「霊の愛」の探究として、彼自身の研究活動に昇華されたのだという事実誤認に乱歩は陥っている。筆者は、この事実誤認を江戸川乱歩の「錯誤行為」と呼びたいのである。

なお、今回は上掲論文の第三回掲載分についての検討を行う。

引用文献

- Brown,H.F.(1903) *John Addington Symonds ; A Biography*.(2nd edition) London: Smith, Elder,&Co., NewYork: Charles Scribner's Sons [reprinted edition by BiblioLife].
- 江戸川乱歩(1933)「J・A・シモンズのひそかなる情熱(二)」『精神分析』(東京精神分析学研究所)1(2),pp.161-171。
- 江戸川乱歩(1936)「彼」江戸川乱歩(2005)『江戸川乱歩全集 第24巻 悪人志願』光文社、pp.375-410。
- 江戸川乱歩(1954)「精神分析研究会一昭和八年度」江戸川乱歩(1970)『江戸川乱歩全集 13 探偵小説四十年(上)』講談社、pp.280-296。
- Ferenczi,S.(1916) *Sex in Psycho-Analysis; contributions to psycho-analysis*. London: Stanley Phillips, The Gorham Press, Boston: Richard G.Badger.
- 伊藤勝彦(2005)『愛の思想史』講談社。
- 北見芳雄・佐藤紀子(1982)『生活の中の精神分析—心の健康と幸福のために』誠信書房。
- 近藤等(2007)「江戸川乱歩の病跡—同性愛志向の発露と創造性」『日本病跡学雑誌』(日本病跡学会)74, pp.63-64。
- 小此木啓吾(2002)『フロイト思想のキーワード』講談社。
- Russell,P.(1995) “Karl Heinrich Ulrichs 1825-1895.” In. *The Gay 100: a ranking of the most influential gay men and lesbians, past and present*. New York: Kensington Books, pp.31-33.
- ラッセル,P.[米塚真治訳](1997)「カール・ハインリヒ・ウルリヒス Karl Heinrich Ulrichs 1825-1895」『ゲイ文化の主役たち—ソクラテスからシニョリレまで』青土社、pp.57-60。
- Symonds,J.A.(1896) *A Problem in Modern Ethics*. London: author's private edition [reprinted edition by Biblio Bazaar].
- Symonds,J.A.(1918) “The Dantesque and Platonic ideals of love.” In. *In the key of blue and other prose essays*. London: Elkin Mathews & John Lane, New York: Macmillan & company, pp.55-86.
- シモンズ,J.A.[田部重治訳](1930)『ダンテとプラトーとの愛の理想』人文書房。
- Weininger,O.(1908) *Geschlecht und Charakter; eine prinzipielle Untersuchung*.(zehnte unveränderte Auflage) Wien und Leipzig: Wilhelm Braumüller [reprinted editon by Hard Press Net.].

鶴田：江戸川乱歩と精神分析—論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱（二）」を読む—

West.D.J.(1968) *Homosexuality*. (2nd revised edition) Harmondsworth, Middlesex,
England: Penguin Books Ltd.